

二〇二五年度 入学試験問題(前期日程)

## 小論文

試験時間 百二十分

教育学部(学校教育教員養成課程)

問題冊子 ページ……一～四

解答用紙……四枚

下書用紙……二枚

配点……表示のとおり

### 注意事項

- 一、試験開始の合図まで、この問題冊子を開かないこと。
- 二、試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び下書用紙の不備等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 三、各解答用紙に受験番号を記入すること。  
なお、解答用紙には、必要事項以外は記入しないこと。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五、解答用紙の各ページは、切り離さないこと。
- 六、配付された解答用紙は、持ち帰らないこと。
- 七、試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰ること。
- 八、試験終了後、指示があるまでは退室しないこと。

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

学びが起こるきっかけは、問いです。

「あれ？ どうしてだろう？」「なんでそうなるの？」と子どもが問いを持ったとき、そばにいる大人が、「面倒だな。そんなこと気にしないでいいんだよ」と思って問いを持つことを否定してしまうか、「すごいところに気がついたね。本当に不思議だね」と思って寄り添うかで、子どもたちの興味や関心は変わっていきます。

ある女の子が、一年生の算数の授業で面白い質問をしたことがありました。問題は次のようなものでした。

「Aちゃんは飴玉<sup>あめ</sup>を五個持っていました。そこにお母さんが何個か飴玉をくれたので、いま、一三個ありますってね。お母さんは何個くれたのでしょうか」  
正解は、「13－5＝8」。答えは八個です。

「くれた」という足し算を、式を立てるときに引き算にして考えなければならぬ問題です。

でも「先生、この問題、おかしい」と、ある女の子は言いました。

「お母さんが飴玉を八個なんてくれるわけないもん。うちは一個しかくれないよ」

この子の場合には、まずこの問題の設定自体に疑問を抱いています。このように、その子の世界で起こることとのズレは、教科に対する興味に大きく影響します。

その子が素直に抱いた問いに対して、「これは算数の世界だから、これでいいの」と言われてしまったとしたら、その子は、「学問の世界は、現実にはありえない世界のことを考えること」と捉え、そこで魅力を感じなくなるかもしれません。

自分に全く関係のないことを数字だけで教えられ、自分なりの疑問や考えを止められると、きっと興味がなくなってしまいうでしょう。それよりも、子どもたちの実際の生活の中にある算数を探したほうが、子どもたちはより興味を持つことができるはずです。

子どもに主体的に学んでほしいと思うなら、算数や数学を、現実の生活の中に見つけていくことが必要です。

日常の世界の中で、子どもたちはさまざまなことに疑問を持っています。

「なんでアリスさんは一列に歩くんだろう」

「なんでお空は青いんだろう」

子どもたちの疑問に対して、「大人には思いつかない疑問だな」「すごいなあ」と私たち大人が思えるかどうか。ここが教育のスタート地点になるのです。

「子ども主体の保育」や「子ども主体の教育」ということがよく言われるのですが、私は、子どもだけが主体になつたとしても、いい教育にはならない

いと考えています。

子どもたち一人ひとりが抱いた疑問を出し合って、共有し、みんなで話し合う。その中で、みんなが一番興味を持ったことについて、一緒に考え、調べる。

そのとき、疑問を持った子どもたちに先生も感動しながら、「そういえば、改めて考えたらなぜだろう。不思議だな」と疑問を持ち、一緒に考え、調べ、学んでいく。先生自身が、疑問を持った子どもたちをサポートする面白さを感じているかどうかで、子どもたちが本当に納得できるところまでたどり着くかが変わります。その姿勢こそ教師や保育者の主体性です。

つまり、子どもに対する理解も含め、先生の中にも貪欲に学ぶ姿勢が必要なのです。子どもたちの主体性と、先生の主体性が複雑に絡まり合って、学びは促進していきます。

親の場合も全く同じです。子どもを育てたい、よい教育をしたいと思うなら、子どもの抱く疑問や子どもの考えに興味を持ち、面白がりながら、自分自身も改めて問いを立てて考えたり調べたりすることです。子どもはその姿を見て、親の世代を乗り越えていくのだと思います。

そして、「問い」が生まれるのは、その対象について関心があることが前提となります。

学校では、子どもたち一人ひとりの「もつとこれについて勉強したい」「こういうことができるようになりたい」という思いを形にできる時間が必要です。それと同時に、自分が学んだことを他者に伝え、他者からの疑問に答え、他者の学びを聞いて面白そうだなと興味の世界を広げる時間も必要です。

子どもたちが何か疑問を持ったときに語り合うこと。そして、その疑問について「面白いことを考えているね」と受け止め合うことが、これからの教育の場には欠かせません。

つまり学びの個別化と学びの共同化の原理が組み込まれていることが望ましいのです。

文部科学省の中央教育審議会も、「二〇二〇年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」(二〇二二)として、個別最適な学び(個に応じた指導)、協働的な学び(多様な他者と協働する学び)を答申に挙げています。

トーク&チョーク方式で先生が説明する授業が全く必要ないとは思いません。従来のような授業も行いながら、それとは別に、質のよい教材や問題集、テキストや実験材料などから自分に合うもの、自分がやりたいことを選んで自分で取り組むことができる時間を確保する。それを調べられるだけの資料やテキストが教室に用意されていることが、理想的な環境だと思えます。タブレットなどが一人一台配布されましたから、その端末からアクセスできるように用意しておくことでもいいでしょう。

たとえばモンテッソーリ教育の小学校では、「人間はどのように進化してきたか」について必ず勉強します。教室には、ホモ・エレクトスやホモ・ハビリスなどの資料がたくさん用意されています。子どもたちは自分で興味を持って学び、「ホモ・エレクトスにはこんな特徴がある」(注4)「ここでホモ・

サピエンスが出てきたんだよね」などと学びながら、各自が学んだことを発表して共有します。宇宙についても同様に学び、時間や空間の中で、人間はどのような存在なのかを一人ひとりが自ら学んでいくのです。

系統的に教えられることがなくても、子どもたちがワイワイ言いながら、自分が興味のあるところから調べ、その結果を発表して共有する、共同化するのを繰り返すうちに、必要なことを学べるようになるのです。

このような授業の形式であれば、個別化も共同化も、同学年である必要はありません。同学年でのクラス編成が一般的になっていますが、これは実は人間の社会から見ると非常に特殊な分け方です。

現在の学校が学年で分けられ、教科によっては習熟度別に分けられている一番の理由は、先生が教えやすいという理由です。教えることを中心にクラスを編成すると、理解力が似通っている子どもたちをまとめたほうが効率的に教えられます。

そしてもう一つ、競争させやすいという理由もあります。同じ力を持っているはずだという前提で、競争をさせる意図もあるのでしょうか。

しかし社会には、同じ年齢の人だけが集団をつくっていることはありません。家族も、会社も、地域社会も、多様な年代の人たちが一緒に暮らしているのです。人間の集団は本来、年齢の幅がかなりあるものですから、人工的につくった学校集団の学年は特殊な集団だと言えます。

たとえば小学校で、一、二、三年生を同じクラス、四、五、六年生を同じクラスにするとどうでしょうか。

勉強でも遊びでも、そこではさまざまな関係が生まれます。同じクラスの友達は競争相手ではなくなり、年上の子は年下の子に対して教え、配慮をし、年下の子は教えられ、憧れを持つことができます。ときには逆もあるかもしれません。自分が人の役に立つこと、感謝されること、異年齢の集団の中では、そのような斜めの関係が多様に生まれます。そのような関係の中で子どもたちの心の育ちや学びを促進する力は、同年齢の均一なクラスと比べ、とても大きくなるはずですよ。

先生が黒板の前に立って説明することなく、基本的にはこのような学習の個別化と集団化の原理で学校を作っているオルタナティブな学校もあります。もちろん、どうしても知っておいてほしいことについては、先生が面白おかしく授業をする時間もあるといいでしょう。シユタイナー(注5)学校などは、どちらも大事にしています。

これからは、学校というもののイメージを「こうでなければならぬ」というものに固定せず、子どもを見ながら柔軟に変えていくこと、子どもたちが自分に合う教育の場を選ぶようになることも考えていかねばなりません。

いま、生産力を上げる競争をし、環境資源を破壊して、大きな問題をいくつも生み出してしまった二〇世紀のツケがあちこちに表出しています。いまある「正解」に疑問を持ち、考え続けることができる子どもたちを育てることができれば、彼らが大人になった頃、つまり、二一世紀の中盤に差しかかると、いままでのやり方を大きく変えられる若い世代が間違いなく出てくると期待しています。

地球の裏側の情報も簡単に手に入る時代になったいま、子どもたちを地球全体の市民だと考えて教育を行わなければなりません。グローバル・シチズンシップ・エデュケーションの時代に突入しました。その一方で、小さなコミュニティをつくり直すことも必要です。若者たちはすでに動き出し、コミュニティづくりを進めています。

いま学校で教育を受けている子どもたちは、親の世代の感覚ではなく、すでに動き始めているZ世代（一九九〇年代～二〇一二年頃に生まれたデジタルネイティブの世代）の感覚をさらに進めていかなければなりません。親世代は、自分たちの下の世代から学ばなければならないのです。

教育は、「試され済みのことを教える」とよく言いますが、それは一つの側面に過ぎません。これからの時代を担う子どもたちを育てるためには、いまの時代より一歩先のことを体験させる必要があります。「試され済み」にこだわってしまうと、一世代前のことを教えることになり、子どもたちが求めている学びとのギャップが開いていきかねません。

「試され済み」や「正解」にこだわらず、正解がない中で「自分なりの解」をつくることの楽しさや面白さをたくさん体験させるにはどうすればいいかを考えることが、学校の役割なのだと思います。

（出典 汐見稔幸著『教えから学びへ 教育にとって一番大切なこと』河出書房新社 二〇二一 ただし出題にあたり、一部を改変した）

（注1） モンテッソーリ教育（イタリアの医学博士・教育者であるマリア・モンテッソーリが生み出した教育法。子どもの自発性を尊重し、子どもが自身の興味や関心に従って課題に取り組み、結果を導き出す過程を重視する）

（注2） ホモ・エレクトス（現生人類が属するヒト属の一種）

（注3） ホモ・ハビリス（現生人類が属するヒト属の一種）

（注4） ホモ・サピエンス（現生人類。現存する唯一のヒト属種）

（注5） シュタイナー学校（ドイツの哲学者・教育者であるルドルフ・シュタイナーが唱えた、個性と自由を重視した教育を行う学校。日本でははじめ、フリースクールとして導入された）

設問一 この文章の要旨を五〇〇字以内でまとめなさい。（二〇〇点）

設問二 これからの学校教育と子どもたちの学びのあり方について、本文の内容をふまえて、あなたの考えを六〇〇字以内で具体的に述べなさい。

（一五〇点）